フランス語能力検定試験 (DELF/DALF, TCF, DAPF) と 日本におけるフランス語教育

富盛伸夫

1. はじめに
2. フランス語能力検定試験の種別・特性・活用方法について
 - 2.1. TCF について
 - 2.2. DELF/DALF について
 - 2.3. 実用フランス語技能検定試験 (DAPF) について
3. 言語教育の目標設定と能力測定基準の問題点
4. 日本の高等教育への CEFR 適用の可能性と展望

1. はじめに

我が国の教育制度においては、初等教育から高等教育まで、外国語教育の理念・目標・カリキュラム構造等について、一貫した、可視的な説明原理の上に構築されているとは言いがたい。最近では特に、国際教育、新たな教養教育、専門分野教育、キャリア形成教育等の充実化や、その他の社会的要請により、言語教育自体との相互関連が問われつつある。実際、部分的には、小学校での(事実上の英語導入を前提とした)国際教育の概念化や、職業選択に直結した言語教育の実効性の議論を通じて、どのような場で、誰を対象に、何の目的で、どの言語を、どこまで習得させるか、については、活発な議論が生まれている。これは、言語教育も、人間社会のコミュニケーション的営為のひとつであるとする紛れも無い前提からすれば、その存立理由や様態、目的性、有効性の評価など、認識論的レベルから現場的なレベルまでの、徹底した問い直しが必要であろう。その中には、特に世界のある地域の歴史・文化に立脚した言語の教育(例えば、アングロサクソン文化を基盤においた英語教育)と、地球上の人類が意思疎通するための媒体として特定の文化領域から切り離れた言語の教育(世界英語 *World Englishes* のようなものに近い)との、住み分けが当然必要になってくるであろう¹。

日本で教育を受ける言語学習者が直面する、教育者側の無責任さに由来する曖昧さは、学習者個々人の側でそのまま、曖昧さを残しつつ、あるいは個人の動機づけの再調整のなかで処理されている。なぜ、英語を勉強するのか、大学に入ってなぜ第二外国語があり、どこまで勉強したら自分はよいのか、あるいはよい成績を取めるとはどういうことなのか? この問いかけは、ほとんどすべて学習者の自己解決に任されており、その解答は学習者にとっては在学中にはなかなか明確には出せないまま修了、卒業してしまうことのほうが多い。教育者側が、その問いを学習者に

¹ 東京外国語大学世界言語社会教育センター主催の国際シンポジウム『越境する人と英語』(2012年3月10-11日)には「世界言語」の教育について活発な議論があった。(議事録は作成中)

放任させている限りにおいては、言語教育の存在、位置づけ、リソースの確保などは極めて危うい状況に立ち入ることとなる。それが、現在の、例えば大学教育における、第二外国語の疲弊的な現状と量的な衰退を加速させていることは、疑いようがない。

さて、ヨーロッパ連合（以下、EUとも）では、全く別の文脈で、高等教育の抜本的改革を行いつつある。EUでは、「ボローニャ・プロセス」と呼ばれる一連の改革が急速に進められている。第一期の目標として、2010年までの10年間で各国が自国の高等教育システムを再構築することを宣誓した「ヨーロッパ高等教育圏（European Higher Education Area, EHEA）の構築が含まれる²。現在までにEUを越えて、ノルウェイやアゼルバイジャンなどを含む50カ国近くの国々が署名している。とりわけ重要なのは、個々の高等教育機関における教育の質保証を徹底した大学評価制度により標準化させ浸透させようとしていることである。EU諸国の多様な歴史的背景から遺産として残存している個別的資格認定のあり方を改め、大学など高等教育機関で提供する教育内容及び学位制度の標準化と達成度評価の明確化への方向が示されている。これにより教育成果の質が可視化され保証される方向にゆけば、欧州域内での学生・研究者の流動性を高め、EU諸国間の国際競争力も高まる目算である。なかでも、外国語教育法の改革と言語能力評価基準の共通性を掲げた「ヨーロッパ共通参照枠組み」（Common European Framework of Reference for Languages、以下CEFR）³は、理論面・実践面ともに、参照枠組みという機能に限ってはその適用が急速に進みつつある。

他方、我が国でも文部科学省より要請されている「達成度評価と学士力の明確化」「質保証」への指導が次第に強制力をもちつつあるのは、地球規模の教育改革に取り残されないための危機感からくるひとつの取り組みに他ならない。しかしながら、学生個人の学習行動にそのポジティブな側面が浸透してくるまでには、相当時間がかかることも予測される。学生は、これからも、言語学習の意味付けや有用性について、自ら問いかけ、答えてゆく状況は変わらないであろう。

本報告は上の問いかけにはすべて答えられないが、その中核的部分、特に、言語能力達成度の測定システムに関わる調査をもとに、事態の改善にむけて一步進めたいと考える。なお、記述に用いた資料や情報は、部分的に、本科研による調査（2009年8月31日～9月10日、ベルギー・ルーヴァン大学、フランス・東洋言語文化学院 Institut National des Langues et Civilisations Orientales、INALCO、フランス・レンヌ大学 Université de Rennes II -Haute Bretagne-、等）および、先行する科研「拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」による現地調査（2009年2月9日～16日、フランス・東洋言語文化学院 Institut National des Langues et Civilisations Orientales、フランス・国際教育研究センター Centre international d'études pédagogiques, CIEP）の聞き取り調査を反映していることを付記する。

² 欧州評議会の公式サイトではボローニャ・プロセスの基本的な概念と詳細な情報が提供されている。
http://www.coe.int/t/dg4/highereducation/EHEA2010/BolognaPedestrians_en.asp

³ CEFRの概要に関する基本情報は巻末の参考文献一覧を参照されたい。

2. フランス語能力検定試験の種別・特性・活用方法について

日本であるか外国であるかを問わず、フランス語学習者が自分の学習成果が見える形で知りたいという場合、いわゆるフランス語検定と呼ばれる制度を利用することができる。これは、基本的には、単独の教育機関が学習期間終了時に出す修了証明や単位認定に比して、社会的客観性が高いとされる。しかし、それぞれの検定制度にはそれぞれの趣旨や枠組みがあるので、ひとつの検定試験の評価が、その学習者の能力をすべて表しているということでは全くない。この報告では、以下、一般的に日本で受験することが可能な3つのフランス語検定(略号で、DELF/DALF/TCF/DAPF)の種別と特性を総括的に記述し、その効果的な活用に向けての指針としたい。⁴

2.1. TCF について

TCF と略号で呼ばれるフランス語能力試験は、Test de Connaissance du Français (直訳すると「フランス語の知識テスト」) で、フランス国民教育省(文部科学省に相当)の認定するフランス語能力テストである。この試験はフランス語圏以外の国の人々を対象とし受験資格に制限はない。日本では2001年秋より実施されて全国では7カ所の試験会場があり、東京日仏学院が受験の窓口および事務的な拠点となっている。

試験は内容別に3つ(読解30問45分、文法20問20分、口頭30問40分、計105分)にわかれ、四択問題式で、フランス語の総合力を確かかつ正確に診断するようになっている。試験終了後、答案は本部のCIEPに送られ、コンピュータによって採点される。評価は、英語のTOEICのように、得点で示され、CEFRのレベルと共に699点満点の点数で示される。受験者の試験結果は合否でなく不合格はない。そのため、資格試験とは異なり、その試験結果の成績レベルの認定は2年間にとどまる。

フランス大使館の情報では、TCFを奨励し何らかの形で実施に協力している大学は、獨協大学、上智大学、南山大学、関西大学外国語教育研究機構、学習院大学、慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス、となっている。ちなみに、東京外国語大学フランス語研究室の前任のフランス人教員はTCFをフランス語能力の測定に活用することに理解を示し前向きであったが、大学としては組織的実施に向けて協力していない。

なお、TCFは2002年12月よりISO(国際標準化規格)の品質基準を得ている。(品質マネジメントシステム2000年版。9001:2000)

2.2. DELF/DALF について

DELF (Diplôme d'études en langue française) と DALF (Diplôme approfondi de langue française) は2つ組み合わさってひとつながりの体系をなすフランス語能力試験であるので、DELF/DALFとしてまとめて呼ばれることが多い。TCF同様、フランス国民教育省の認定する非母語話者受験者に対して実施される大規模なフランス語能力の資格試験である。試験は年に2回、世界では150

⁴ 富盛伸夫「フランス語能力検定試験と言語能力評価基準」外国語教育学会紀要『外国語教育学会』第9号 (pp. 104-115) を参照。

カ国、日本では8カ所あり、TC試験会場とほとんどが重複しているが日仏学院・日仏学館、アリアンス・フランセーズ系の文化機関が会場となる。日本における DELF と DALF の認証は関西日仏センター=アリアンス・フランセーズにおかれている DELF と DALF 国家委員会とフランス大使館文化部の管理のもとに行われる。

DELF と DALF は 1985 年より実施されているが、6つの独立したレベルによって構成されている。2005 年秋試験から、CEFR に準拠した 6 等級 (A1~C2) に対応するようになっている⁵。受験者は自身のレベルに応じ、希望するレベルの試験を選んで受けることになる。各級は、口頭による理解力および表現力、筆記による理解力および表現力の4種類の能力の審査により評価される。レベル DELF:A1 (初心者1)、A2 (初心者2)、B1 (自立可能者1)、B2 (自立可能者2)、DALF:C1 (熟達者1) は聴解 (25 点)、読解 (25 点)、文書作成 (25 点)、口頭表現 (25 点) で構成され、100 点満点のうち、50 点の得点で合格となる。また、各分野につき最低 5 点の獲得が必要とされる。これに対し最上級の DALF:C2 (熟達者2) では、聴解・口頭表現 (50 点)、読解・文書作成 (50 点) で構成され、100 点満点のうち、50 点の得点で合格、また、各分野につき最低 10 点の獲得が必要とされる。

DALF の C1 レベルと C2 レベルはフランスの大学など高等教育機関へ留学する際の入学に必要なフランス語能力資格試験という役割も果たしており、試験の受験が義務付けられている場合がある。この点では、英語圏への留学時の語学能力証明として用いられる TOEFL の成績証明に相当すると考えてよい。

(表1) DELF/DALFの各レベル別の試験内容

試験	読解	文書作成	聴解	口頭表現
A1	日常的な事柄に関する4、5つのテキストを読み、設問に答える。(30分)	試験は次の2要素から構成される。(30分) ・カードや申請書に記入する ・日常的な事柄に関して簡単な文章(葉書、メッセージ、説明文など)を作成する。	録音された日常的な事柄に関する3、4つの短いテキストを聴き、設問に答える。(約20分)	試験は次の3要素から構成される。(準備10分/面接5~7分) ・試験官の質問に答える ・情報を交換する ・架空のシチュエーションを設定して会話を展開させる
A2	日常的な事柄に関する4、5つのテキストを読み、設問に答える。(30分)	友人への手紙やメッセージといった短い文書を作成する。(45分) ・個人的な出来事や体験を記述 ・招待状、お礼状、お詫びや依頼、案内やお祝いの手紙などの作成。	録音された日常的な事柄に関する3、4つの短いテキストを聴き、設問に答える。(約25分)	試験は次の3要素から構成される。(準備10分/面接6~8分) ・試験官の質問に答える ・試験官の前で語る ・試験官との対話
B1	2つのテキストを読み、設問に答える。(35分)	一般的なテーマ(エッセイ・手紙・新聞記事等)に関して個人的見解を表現	録音された3つのテキストを聴き、設問に答える。(約25分)	試験は次の3要素から構成される。(準備10分/面接約15分) ・試験官の質問に答える

⁵ 他にゼロ初級向けの DILF や DELF junior も設定されているが日本では実施されていない。

B1	2つのテキストを読み、設問に答える。(35分) ・与えられた課題に対してテキストの中から必要な情報を取り出す ・一般的なテーマに関するテキストの内容を分析する	一般的なテーマ (エッセイ・手紙・新聞記事等) に関して個人的見解を表現する。(45分)	録音された3つのテキストを聴き、設問に答える。(約25分)	試験は次の3要素から構成される。(準備10分/面接約15分) ・試験官の質問に答える ・試験官との対話 ・与えられたテキストについての見解の表現
B2	2つのテキストを読み、設問に答える。(60分) ・フランスもしくはフランス語圏に関する情報提供を目的とするテキスト ・texte argumentatif (ある主題について論説しているテキスト)	自分の見解を論証する (討論・公式文書・論評を参照して)。(60分)	録音された2つのテキストを聴き、設問に答える。(約30分) ・インタビュー、ニュース番組等 ・解説、講演、スピーチ、ドキュメンタリー番組、ラジオ・テレビ放送など	与えられたテキストに関する見解の論証 (準備30分/面接約20分)
C1	文芸批評、社説といった、1500から2000語の思想文を読み、設問に答える。(50分)	試験は次の2要素から構成される。(150分) ・合計1000語程度の複数のテキストについての総論の作成 ・テキストの内容について論説する 受験者はあらかじめ2つのテーマ (文芸・人文科学あるいは科学) から1つを選択する。	録音された2つのテキストを聴き、設問に答える。(約40分) ・インタビュー、講義、講演といった8分程度のテキスト ・ニュースダイジェスト、世論調査、コマーシャルといった、ラジオ放送された複数の短いテキスト	複数のテキストについてのエクスポゼと試験官との討論。(準備60分/面接30分) 受験者はあらかじめ2つのテーマ (文芸・人文科学あるいは科学) から1つを選択する。
	口頭表現試験の準備時間のみ仏辞書使用可能			
C2	2000語程度のテキストから、論文、社説、報告書、あるいは演説など、構成の整った文書を作成する。(210分) 受験者はあらかじめ2つのテーマ (文芸・人文科学あるいは科学) から1つを選択する。		試験は次の3要素から構成される。(準備60分/面接30分) ・録音されたテキストを2回聴き、その内容を要約する ・テキストが取り上げている問題点について、自分の見解をまとめる ・試験官との討論	

実用的な側面を持つ TCF と、外国人がフランスの教育機関で勉学する上に必要となる「アカデミック・フランス語」をもレベル設定にいった DELF/DALF は、資格認定の基本的な差異がある。しかし、どちらもフランス政府直轄の試験である DELF/DALF と上記の TCF の特性を対照すると、これら 2 つは CEFR への準拠など共通している側面が多い。両試験の中核的本部であるパリ郊外セーヴルにある CIEP での関係者の説明によれば、これら 2 つの能力試験の間にはレベル対応は整理されており、外から見れば差異は少ない。

(表2) CEFR と DELF/DALF、TCF および 日仏学院の能力達成度の記述の対照表

CEFR と DELF/DALF	TCF	日仏学院の能力達成度の記述
DALF C2/レベル6 Supérieur avancé 非常に優れたフランス語の運用能力を持つ。読むもの、聞くもののすべてを即座に理解し、的確に要約することができる。複雑なテーマについても、様々な形で、ニュアンスを交えつつ流暢に意見を述べるができる。	レベル6 maîtrise (601点～700点) (DALF C2に相当)	聞いたり読んだりするほぼすべてのものを容易に理解することができる。さまざまな書き言葉・話し言葉による情報から得た事実や論拠を、まとまった要約のかたちで再構成できる。自然に、とても流暢に、かつ正確に自己表現ができ、複雑な事柄の細かい意味の違いをはっきりさせることができる。
DALF C1/レベル5 Supérieur 学習時間の目安：760時間 フランス語の優れた運用能力を持つ。含みのある難解な長文テキストであっても、そのほとんどを解し、自分の社会的な立場や仕事、学問との関わり、あるいは他の複雑なテーマについて、流暢かつ論理的に述べるができる。	レベル5 supérieur (501点～600点) (DALF C1に相当)	あらゆる難しい長文を理解することができ、言外の意味も把握できる。言葉を探しているという印象をあまり与えずに、自然に、また流暢に自己表現ができる。社会的・職業的・学問的な目的に応じ、効果的で柔軟な言葉遣いができる。複雑な話題について明確に、またしっかりとした構成で表現できる。文章を構成する表現や接続表現、つながりの表現に習熟していることが伺える。
DELF B2/レベル4 Intermédiaire avancé 学習時間の目安：510時間 フランス語を全般にわたって自主的に運用できる。複雑なテキストの要点を理解すると同時に、一般的あるいは専門的な内容の会話に参加し、筋道の通った意見を明確かつ詳細に述べるができる。	レベル4 avancé (501点～600点) (DELF B2に相当)	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、複雑な文章における具体的・抽象的事柄の要点が把握できる。お互いに緊張しないでネイティブスピーカーと自然かつ流暢にやりとりができる。さまざまな話題について、明確かつ詳細に表現したり、時事的な話題について意見を述べたり、色々な可能性の長所や短所を挙げるができる。
DELF B1/レベル3 Intermédiaire 学習時間の目安：330時間 フランス語を効果的にマスターしているが、限界がある。身近な分野の明快で標準的な表現であれば理解できる。旅行先で会話をこなし、自分に興味のあることを話すことができる。計画やアイデアに関して短く説明することも可能。	レベル3 intermédiaire (401点～500点) (DELF B1に相当)	仕事、学校、レジャーなどに関する身近な話題が、明快で標準的な言葉遣いで表現されていれば、その要点を理解できる。フランス語が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいいてい事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について、簡単だがまとまりのあることが言える。出来事、経験、夢、希望、目的などを説明したり、計画や考えを簡単に説明し、その理由を述べたりできる。
DELF A2/レベル2 Élémentaire avancé 学習時間の目安：170時間 フランス語の初歩をマスター。身近な分野の単文を理解できる。慣れた状況でならコミュニケーションが可能。自分に関する問題を単純な手段で表現できる。	レベル2 élémentaire (301点～400点) (DELF A2に相当)	自分に直接かわりのある分野（自分や家族の情報、買い物、身近な環境、仕事など）でよく使われる文や表現を理解できる。身近で日常的な話題に関して、相手と直接情報交換しながら、単純で日常的なやりとりができる。自分の学歴、身の回りの状況、さしあたって必要な事柄を簡単な言葉で説明できる。
DELF A1/レベル1 Élémentaire 基礎レベル 学習時間の目安：80時間 フランス語の基礎レベル。日常生活での単純で具体的な状況を理解できる。相手がゆっくり話すなら、簡単なコミュニケーションも可能。	レベル1 débutant (100点～199点) (DELF A1に相当)	最低限必要なことを行うための、よく使われる日常的表现やごく簡単な言い回しを理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、個人的な質問（住んでいる場所、知り合い、持ち物など）について質問をしたり、答えたりできる。相手がゆっくり、はっきり話してくれ、協力的であれば、簡単なやりとりができる。

実際、東京日仏学院の案内サイトに記載されている授業のレベル設定の記述では、能力レベル

と達成度の記述については、CEFR のそれに準拠して簡略的に共通化してある⁶。他方、日仏学院で開講する授業に関するレベルの記述では、発話の状況とタスクに関してより具体的で Can-Do Statements 的に理解できるように配慮してある⁷。(表2を参照)

2.3. 実用フランス語技能検定試験 (DAPF)について

日本で最も古く、また広く普及しているフランス語能力試験は、財団法人フランス語教育振興協会が実施している「実用フランス語技能検定試験」(Diplôme d'Aptitude Pratique au Français)で、1981年に開始され、1986年から文部省(当時)の認定を受けた唯一の日本の「検定」試験といわれてよい。略称を英語検定(英検)にならって、「仏検」とも呼ばれる⁸。仏検全級合計の受験者は創設以来の延べ受験者数としては約50万人に達するが、そのピークは2000年代の中頃であり、最近は年間約3万5千人前後となっている。

いわゆる「仏検」は、従来からCEFRへの対応を急ぐより、日本人の学習進度に沿った能力評価段階を採用していることを方針としている。仏検は現場のフランス語教育関係者が創設の構想をねり、長期にわたって企画・運営をしてきた経緯もあり、日本の大学などの初習からのフランス語教育の実態に即した独自の能力基準をもっていることを特徴としているなど、TOEFLやTOEICと住み分けている英検のあり方と、ある意味で平行している。

また、英検実施の団体である財団法人日本英語検定協会ではCEFRと英検レベルとの対応を公開しているが、仏検に関してもフランス語教育振興協会は同様に、CEFRと仏検レベルとの相関表を図示するようになった⁹。

(表3)

級	学習時間数	およその対応
1級	600時間	DALF C1/C2
準1級	500時間	DELF B2
2級	400時間	DELF B1
準2級	300時間	DELF A2
3級	200時間	DELF A1
4級	100時間	
5級	50時間	

⁶ http://www.ciep.fr/tcf/document/manuel_candidat.PDF

⁷ <http://www.institut.jp/ja/apprendre/examens> から合成して作成。

⁸ <http://apefdapf.org/france/mark/index.html> を参照。

⁹ <http://apefdapf.org/> を参照。

具体的には、準1級と準2級を含め7つの級が設定されているが、語彙を例にとると、主催機関フランス語教育振興協会のサイトなどから公表されている情報によると、5級では基本単語590語、4級では約940語程度が目安となっている。3級に要求される語彙数は約1700語とされている。これは学習段階では大学ないし高等学校のフランス語授業で200時間以上の学生が受験すると、合格基準点をクリアする程度の得点がとれることを想定して、問題が作成されている。しかしながら、段階別の文法項目や連語・成句表現の習得段階と仏検のレベルとの明確な対応関係は、仏検公式問題集などを詳しく読めば推測されるものの、明示的には公表されておらず、また関係する研究例も多くなく、受験生には過去の問題データから一定の傾向を把握する努力が必要となっている。

仏検の認定証（ディプロム）が上級であれば、単位取得や編入学試験の資格認定の有利な条件となるケースも増えてきている。また、社会の評価・認知度は長い歴史から、また英検からの類推から、仏検の1級、または2級といえはる程度のイメージが喚起されるまでになっている。また、教育者側では、級別、進度別評価システムに対する慎重な態度は以前残ってはいるものの、教育現場では、「～級を突破しよう！」などといった励ましには効果的で便利な指標ではある。

以下に、公式サイトと公式問題集をもとに仏検の級別能力レベルと学習進度、学習時間の目安の一覧表を掲載する。

(表4) 実用フランス語技能検定試験（仏検）の試験内容と評価基準¹⁰

1級（年1回、春季のみ）

	試験内容	時間	配点（点）	レベル
《一次》	筆記試験	120分	/100	「読む」「書く」「聞く」「話す」という能力を高度にバランスよく身につけ、フランス語を実地に役立てる職業で即戦力となる。 標準学習時間：600時間以上。 語彙：制限なし。
	書き取り試験(Dictée)	40分	/20	
	聞き取り試験		/30	
《二次》	面接試験 (あらかじめ与えられた課題に関するスピーチとそれをめぐるフランス語での質疑応答)	9分	/50	
			/200	
試験内容	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く：ラジオやテレビのニュースの内容を正確に把握できる。広く社会生活に必要なフランス語を聞き取る高度な能力が要求される。 ・読む：現代フランスにおける政治・経済・社会・文化の幅広い領域にわたり、新聞や雑誌の記事など、専門的かつ高度な内容の文章を、限られた時間のなかで正確に読み取ることができる。 ・話す：現代社会のさまざまな問題について、自分の意見を論理的に述べ、相手と高度な議論が展開できる。 ・書く：あたえられた日本語をフランス語としてふさわしい文に翻訳できる。その際、時事的な用語や固有名詞についての常識も前提となる。 ・文法知識：文の書きかえ、多義語の問題、前置詞、動詞の選択・活用などについて、きわめて高度な文法知識が要求される。 			

¹⁰ 財団法人フランス語教育振興協会編『仏検公式問題集』（2010年度版、1～5級）、駿河台出版社、2010年 による。

準1級 (年1回、秋季のみ)

	試験内容	時間	配点 (点)	レベル
《一次》	筆記試験	100分	/80	日常生活や社会生活を営むうえで必要なフランス語を理解し、一般的な内容はもとより、多様な分野についてのフランス語を読み、書き、聞き、話すことができる。 標準学習時間：500時間以上。 語彙：約5000語。
	書き取り試験(Dictée)	30分	/20	
	聞き取り試験		/20	
《二次》	面接試験 (あらかじめ与えられた課題に関するスピーチとそれをめぐるフランス語での質疑応答)	7分	/40	
			/160	
試験内容	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く：一般的な事柄を十分に聞き取るだけでなく、多様な分野にかかわる内容の文章の大意を理解できる。 ・読む：一般的な内容の文章を十分に理解できるだけでなく、多様な分野の文章についてもその大意を理解できる。 ・話す：身近な問題や一般的な問題について、自分の意見を正確に述べ、相手ときちんとした議論ができる。 ・書く：一般的な事柄についてはもちろんのこと、多様な分野についても、あたえられた日本語を正確なフランス語で書きあらわすことができる。 ・文法知識：文の書きかえ、多義語の問題、前置詞、動詞の選択・活用などについて、かない高度な文法知識が要求される。 			

2級 (年2回、春季・秋季)

	試験内容	時間	配点 (点)	レベル
《一次》	筆記試験	90分	/68	日常生活や社会生活を営む上で必要なフランス語を理解し、一般的なフランス語を読み、書き、聞き、話すことができる。 標準学習時間：400時間以上 語彙：約3000語。
	書き取り試験(Dictée)	35分	/14	
	聞き取り試験		/18	
《二次》	面接試験 (フランス語での質疑応答)	5分	/30	
			/130	
試験内容	<ul style="list-style-type: none"> ・聴く：一般的な事柄に関する文章を聞いて、その内容を理解できる。 ・読む：一般的な事柄についての文章を読み、その内容を理解することができる。 ・話す：日常生活のさまざまな話題について、基本的な会話ができる。 ・書く：一般的な事柄について、伝えたい内容を基本的なフランス語で書き表すことができる。 ・文法知識：前置詞や動詞の選択・活用などについて、やや高度な文法知識が要求される。 			

準2級 (年2回、春季・秋季) (2006年春季より新設)

	試験内容	時間	配点 (点)	レベル
《一次》	筆記試験	75分	/70	日常生活における平易なフランス語を、読み、書き、聞き、話すことができる。 標準学習時間：300時間 語彙：2300語。
	書き取り試験(Dictée)	35分	/12	
	聞き取り試験		/18	
《二次》	面接試験 (フランス語での質疑応答)	5分	/30	
			/130	
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く：日常的な平易な会話を理解できる。 ・読む：一般的な内容で、ある程度の長さの平易なフランス語の文章を理解できる。 ・話す：簡単な応答ができる。 ・書く：日常生活における平易な文や語句を正しく書ける。 ・文法知識：基本的事項全般についての十分な知識。 			

3級（年2回、春季・秋季）

	試験内容	時間	配点（点）	レベル
《一次》	筆記試験	60分	/70	フランス語の文構成についての基本的な学習を一通り終了し、簡単な日常表現を理解し、読み、書き、聞き、話すことができる。 標準学習時間：200時間（大学の2年修了程度。一部高校生も対象となる。） 語彙：約1700語。
	聞き取り試験	15分	/30	
			/100	
試験内容	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く：簡単な会話を聞いて内容を理解できる。 ・読む：日常的に使われる表現を理解し、簡単な文による長文の内容を理解できる ・書く：日常生活でつかわれる簡単な表現や、基本的語句を正しく書くことができる。 ・文法知識：基本的文法知識全般。動詞については、直説法、命令法、定型的な条件法現在と接続法現在の範囲内。 			

4級（年2回、春季・秋季）

	試験内容	時間	配点（点）	レベル
《一次》	筆記試験	45分	/66	日常の基礎的なフランス語を理解し、読み、聞き、書くことができる。 標準学習時間：100時間以上（大学の1年修了程度。高校生も対象となる。） 語彙：約940語。
	聞き取り試験	15分	/34	
			/100	
試験内容	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く：基礎的な文の聞き分け、日常使われる基礎的応答表現の理解、数の聞き取り。 ・読む：基礎的な文の構成と文意の理解。基礎的な対話の理解。 ・文法知識：日常使われる基礎的な文を構成するのに必要な文法知識。動詞としては、直説法（現在、近接未来、近接過去、複合過去、半過去、単純未来）、命令法等。 			

5級（年2回、春季・秋季）

	試験内容	時間	配点（点）	レベル
《一次》	筆記試験	30分	/60	初歩的なフランス語を理解し、聞き、話すことができる。 標準学習時間：50時間以上（中学生から、大学の1年前期修了程度の大学生に適している。） 語彙：約590語。
	聞き取り試験	15分	/40	
			/100	
評価基準	<ul style="list-style-type: none"> ・聞く：初歩的な文の聞き分け、挨拶等日常的な応答表現の理解、数の聞き取り。 ・読む：初歩的な短文の構成と文意の理解、短い初歩的な対話の理解。 ・文法知識：初歩的な日常表現の短文を構成するのに必要な文法的知識。動詞としては、直説法現在、近接未来、近接過去、命令法の範囲内。 			

仏検のデータから見た、それぞれのレベルで要求されているフランス語能力は、EUのCEFRと比較すると基準の記述が若干簡略的にできており、かつ実施の言語能力判断項目がどのように対応されているかまでは公表されていないため、レベルの差と能力判断項目との対応関係の詳細は不明である。しかしおおよそ、大学あるいは高等学校のフランス語学習の進行段階に沿った作り方をしていることは明らかであろう。

ここで、大学でのフランス語教育の目指す目標と教授法自体が最近大きく変化してきていることは留意しておかねばならない。議論の詳細に立ち入ることは小論の目的ではないので割愛するが、20年以上前からコミュニカティブ・アプローチ他の教授法が試行され、能力評価法もタスクに対する Can-Do Statements の開発が進められている¹¹。他方で、文構成の理解や概念化を重視した従来型の教授方法においても、語彙・文法・表現等の習得進度に対応したメソッドも改良されてきているので、簡単な是非論にはならない。その上で、仏検はイラストを利用した聞きとり試験や2次試験に口頭試問でインタラクティブ性を加えるなど工夫をしつつ、後者に軸足を据えた出題方針を揺らがせず、能力評価も上述の通りである。

3. 言語教育の目標設定と能力測定基準の問題点

言語教育の目標の達成に必要な言語能力基準と、必要とされる学習時間との相関性は、日本とフランスで大きな相違がある。実用フランス語技能検定試験 (仏検) の試験内容と DELF/DALF の能力試験内容とで、同じ学習時間の目安 (例えば約 200 時間) を前提としながらも、仏検の方は3級 (表4参照) での必要時間となっている。そして、仏検側からは表3に見るように、DELF/DALF の相当級を A1 としている。たしかに DELF/DALF であると最下位級の A1 でもかなりの難易度は低くない。他方、DELF/DALF の能力試験では、200 時間程度の学習時間で到達するとされているのは A2 と B1 の間のレベルで、その能力判断項目を東京日仏学院の基準を参考にすると、A2 としては「自分に直接かかわりのある分野 (自分や家族の情報、買い物、身近な環境、仕事など) でよく使われる文や表現を理解できる。身近で日常的な話題に関して、相手と直接情報交換しながら、単純で日常的なやりとりができる。自分の学歴、身の回りの状況、さしあたって必要な事柄を簡単な言葉で説明できる。」ということで、仏検からみた DELF/DALF の A1 「最低限必要なことを行うための、よく使われる日常的表現やごく簡単な言い回しを理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、個人的な質問 (住んでいる場所、知り合い、持ち物など) について質問をしたり、答えたりできる。相手がゆっくり、はっきり話してくれ、協力的であれば、簡単なやりとりができる。」とはかなりの開きがある。

この理由としては、言語類型の類似性や文化の近似性が EU 基準の CEFR にも反映していることは、おそらく間違いない。しかし、依然として、同程度の学習時間数でフランス語能力達成度の期待値に大きな差があるというからには、日本におけるフランス語教育の伝統的な学習進度基準を骨格にして概念化された仏検の7段階が、いったいフランス語実用能力の何に対応しているのかということが問題となる。

第一外国語、第二外国語としてのフランス語の授業に提示される文法項目や語彙数、コロケーション、構文等の難易度の進度が、学習者におけるフランス語の定着を測定する判定要素であることは間違いない。しかし、仏検の試験内容のあり方に対して現場からの異論がないわけではな

¹¹ ATE のポータルサイト <http://www.alte.org/cando/index.php> を参照。

いことも事実である¹²。議論としては第一に、「仏検」と DELF/DALF とのレベル的対応についての問い直し、第二に、コミュニケーション重視の DELF/DALF と「文法的な仏検」との教育目標の対立、第三に、到達度判定の試験として DELF/DALF あるいは TCF との競合・住み分けの問題、などが問題提起されている。関西大学においては全学的に到達度の評価基準を、仏検ではなく TCF で判定する方向をとっているとのことで、その学習者コーパスも参考にしたところである。

今後、現実の複雑なコミュニケーションの状況の中で一定のタスクを与え問題解決的な言語遂行能力を測定するシステムとして、仏検が EU の共通参照枠組との相互連関を具体的にどのように明確に指し示してゆくのか、あるいは、全く別の能力の部分を評定することを方針としてゆくのか、が焦点となろう。この問題設問が、国内における当面唯一のフランス語検定として機能を発揮する契機となると考えられる。

4. 日本の高等教育への CEFR 適用の可能性と展望

近年言語教育の目標の幅が大きく振幅し、学習者のニーズを意識化するとともに、教育目標と教授メソッドも多様化しつつある。かつては「実用フランス語技能検定」という英検に倣った名称が、大学のフランス語教員の間には不評であった歴史がある。今や教養主義のみを追求したカリキュラム策定は推奨されず、必ずしも大学で教えるフランス語は実用にならなくともよいとするフランス語教育はなかなか論理が立てにくい。他方で、社会のニーズなどにも答えねばならない現代では、有限な授業時間の中でスキルアップのためのフランス語教授法と、同様に学習動機としても今もニーズの高いフランス文化・文明論分野でどの程度を提供するべきなのか、さらなる検討が必要となろう。

毎年新たなフランス語教育カリキュラムを構想するなかで、2 つのクラスがあるばあい、それらを共通の内容にするのではなく、例えば「検定を活用した語学力重視コース」と「フランス文化論などの教養コース」といった学習目標を異にする 2 つの構成にするのが望ましいであろう。仏検と CEFR 基準の DELF/DALF では測定される能力が大きく異なる。仏検では、なにかんづく豊富な語彙力と高度な文法知識とが測定され、総合的な読解力と書く力が問われる。

言語能力達成の判定基準を、仏検利用の枠組みか、DELF/DALF や TCF のような EU の共通参照枠組への準拠か、あるいは独自の測定基準を立てるか、を明確にせねばならない。現在、仏検を何らかの形で外国語科目の言語能力判定に活用している大学は増えつつある。教育プログラムや単位認定制度に導入した実績としては、1 級合格者に 16 単位を与えている島根大学の例もある。カリキュラムの再編が進み、財政上も有限なリソースの中で、フランス語のみならず、各種の言語能力検定試験の積極的な活用をすべきであろう。

日本各地のフランス語教育の現場では、測定方法としての仏検、あるいは DELF/DALF、またはこれらの双方の導入をすすめているところも多くなってきた。全国では約 500 の教育機関の学

¹² 例えば、立命館大学の野崎次郎 (2006) 参照。

生が受験し、その内、大学・短期大学が 450 ほど、高等学校等が約 50 校である。授業シラバスに到達度設定を説明している先駆的な一例を挙げると、長崎外国語大学では、学生向けには CEFR に準じたタスク解決能力の明示的記述はしていないが、仏検レベルと CEFR レベルとの両方を併記して記述していることは注目してよいであろう。

(表 5) 長崎外国語大学の言語別到達目標と各種検定試験レベル

--	1 年終了時	2 年終了時	3 年終了時	4 年終了時
到達目標	文法の基礎を理解し、簡単な日常会話ができ、基礎的な短文の読み書きができる。	文法の基礎をマスターし、生活に密着した範囲の会話が自由にできる。身近な分野の文章を理解し、書くこともできる。	身近な分野の話の内容を理解し、自分の意見を述べるができる。新聞などの短い記事を読むことができる。またそれについて口頭で説明でき、文章にも正しくまとめることができる。	日常生活や社会生活に必要な言葉を理解し、自主的に運用できる。新聞・雑誌などの記事を読み、その大意を要約できるとともに、筋道の取った意見を明確に述べるができる。
ドイツ語	ドイツ語技能検定試験 5 級～4 級レベル (語彙：約 1,500 語) Start Deutsch 1 (CEFR* A1 レベル)	ドイツ語技能検定試験 4 級～3 級レベル (語彙：約 2,000 語) Start Deutsch 2 (A2 レベル)	ドイツ語技能検定試験 3 級～2 級レベル (語彙：約 3,000 語) Zertifikat Deutsch (B1 レベル)	ドイツ語技能検定試験 2 級～準 1 級レベル (語彙：約 5,000 語) ZDFB/TDN3 (B2 レベル)
フランス語	実用フランス語技能検定試験 4 級～3 級レベル (語彙：約 1,500 語) DELF(A1 レベル)	実用フランス語技能検定試験 3 級～準 2 級レベル (語彙：約 2,200 語) DELF(A2 レベル)	実用フランス語技能検定試験 準 2 級～2 級レベル (語彙：約 3,000 語) DELF(B1 レベル)	実用フランス語技能検定試験 2 級～準 1 級レベル (語彙：約 5,000 語) DELF(B2 レベル)
中国語	中国語検定試験 準 4 級～4 級レベル HSK* 2 級～3 級レベル	中国語検定試験 4 級～3 級レベル HSK 4 級～5 級レベル	中国語検定試験 3 級～2 級レベル HSK 5～6 級レベル	中国語検定試験 2 級～準 1 級レベル HSK 6～7 級レベル
韓国語	韓国語能力試験 1～2 級レベル 「ハングル」能力試験 5～4 級レベル	韓国語能力試験 2～3 級レベル 「ハングル」能力試験 4～3 級レベル	韓国語能力試験 3～4 級レベル 「ハングル」能力試験 準 2～2 級レベル	韓国語能力試験 4～5 級レベル 「ハングル」能力試験 2～準 1 級レベル

* A1, A2, B1, B2, C1, C2=CEFR (ヨーロッパ共通参照枠準拠)

* HSK:「漢語水平考試」 (Hanyu Shuiping Kaoshi の略称) 中国教育部公認 中国語能力認定標準化国家試験

現在、日本を含む高等教育の言語能力達成度評価システムの確立に向けた方策の研究が重要性を増している¹³。ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーの定義が未成熟で、当該大学・学部で修得させる言語能力を明確に説明し公開しているところは少ない。日本での本格的先行事例として注目に値するのは、旧大阪外国語大学外国語学部 (現大阪大学外国語学部) における

¹³ これに関わる富盛伸夫の私的見解は、外国語教育学会紀要『外国語教育学会』第 12 号を参照。

CEFR 準拠のシラバス作成と到達度評価方法の研究の試みである¹⁴。(表6)は、フランス語の適用例を示したものである。

(表6) 旧大阪外国語大学外国語学部における CEFR 準拠のシラバス作成の研究例

フランス語	1年次 到達度目標	2年次 到達度目標	
聞くこと	<p><授業で></p> <ul style="list-style-type: none"> ・明瞭にゆっくりと話されたら授業での課題や説明を理解できる。 ・生活の基本的な事柄の範囲であれば、説明を理解できる。 <p><フランスで></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の具体的な事柄に関する基本的な語や表現、説明を聞き取れる。 <p>相当レベル CEFR/A1</p>	<p><授業で></p> <ul style="list-style-type: none"> ・明瞭に話されたら、授業に関する課題や説明を理解できる。 ・社会や文化の基本的な事柄の範囲であれば、教師の説明や他の学生のプレゼンテーションを理解できる。 <p><フランスで></p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人や家族の情報、買い物、近所、仕事など自分に関係のある領域でよく使われる語彙や表現を理解することができる。 ・生のメッセージやアナウンスの要点を聞き取るにはまだ困難が伴う。 <p>相当レベル CEFR/A2-B1</p>	
読むこと	<p><授業で></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科書用に編集された簡単なテキストなら、理解できる。 ・生のテキストでも日常的なテーマで短く簡単なものなら辞書を用いて理解できる。 ・やや抽象性の高いテキストは、辞書を用いてゆっくり時間をかければ理解できる。 <p><フランスで></p> <ul style="list-style-type: none"> ・標示やポスター、カタログなどに書かれた、よく知られた名前や単語、単純な文などを理解できる。 <p>相当レベル CEFR/A1</p>	<p><授業で></p> <ul style="list-style-type: none"> ・短い簡単な具体的なテーマについてのテキストならその場で理解できる。 ・辞書を用いて時間をかければ、やや複雑なテーマについての文章を理解できる。 <p><フランスで></p> <ul style="list-style-type: none"> ・広告やパンフレット、メニュー、予定表のような具体的なテキストなら、その場で必要な情報を取り出すことができる。 ・簡単に短い個人的な手紙や説明文を理解できる。 <p>相当レベル CEFR/A2-B1</p>	
話す	やりとり(会話への参加)	<p><授業・フランスで></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師がゆっくり話し、繰り返しや言い換えをし、また自分が表現するときに助けを出してくれるなら、必要に迫られた事柄やごく身近な話題について、過去と未来のことも含めて、簡単なやり取りをすることができる。 <p>相当レベル CEFR/A1</p>	<p><授業で></p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師のリードがあれば、日常生活についての身近な話題や活動、あるいは教科書の内容について、なんとか会話を続けられる。 <p><フランスで></p> <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活の具体的なテーマや場面についてであれば、会話の流れが滞ることがあってもやり取りをすることができる。 <p>相当レベル CEFR/A2-B1</p>
	表現(一人で行う報告など)	<p><授業・フランスで></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の住んでいる所や町、知っている人たちについて、簡単な語句や文を使って説明できる。 ・自分の大学生活や日常生活の大まかな事柄については、過去と未来のことも含めて、なんとか伝えることができる。時間をかけて準備すれば小さいプレゼンテーションをすることもできる。 <p>相当レベル CEFR/A1</p>	<p><授業・フランスで></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族、周囲の人々、居住条件、学歴、職歴などについて、簡単な一連の語句。 ・イディオム・文などを使って説明できる。 ・十分準備時間があれば、関心を持つテーマについて短いプレゼンテーションを用意し行うことができる。 <p>相当レベル CEFR/A2-B1</p>
書くこと	<p><授業で></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の趣味・関心事、週末や休暇中の出来事などに関してなら、十分な時間をかければ、少々の文法的誤りが会っても、短い説明文や報告文を書くことができる。 <p>相当レベル CEFR/A1</p>	<p><授業で></p> <ul style="list-style-type: none"> ・簡単な内容については、語彙の選択などに不適切さはあっても、その場で簡単な報告を書くことができる。 ・十分時間をかければ、教科書やビデオの内容要約を書くことができる。 <p><フランスで></p> <ul style="list-style-type: none"> ・簡単な事柄についての短いメモやメッセージ、あるいは札状などの個人的な手紙を書くことができる。 <p>相当レベル CEFR/A2-B1</p>	
目標言語圏又は日本で実施されている公式語学検定試験についての概要			

¹⁴ 真嶋潤子 (2007), 「言語教育における到達度評価制度に向けて ―CEFR を利用した大阪外国語大学の試み」 『問谷論集』 創刊号, 日本語日本文化教育研究会, pp. 3-27. 他の報告を参照。

この表に見るように非英語言語を含む言語科目の到達度評価システムの研究をすすめシラバスでの CEFR 基準による明記など実施している。1 年次末の到達目標として、書く能力は<授業で>「自分の趣味・関心事、週末や休暇中の出来事などに関してなら、十分な時間をかければ、少々の文法的誤りがあっても、短い説明文や報告文を書くことができる。」という程度の能力、読む能力では<フランスで>「標示やポスター、カタログなどに書かれた、よく知られた名前や単語、単純な文などを理解できる。」というように、発話の場、状況、発話意図など、非常に具体的な指示が与えられている。この発話状況などは、あくまでもレベル設定を考える上でのサンプルを提示していると理解してよいだろう。多言語に対応して言語別の Can-Do 記述を研究する上でも、参考になる先事例である。

CEFR は、EU という多言語・多文化・多民族共同体を統合するための基本的コミュニケーションの実現のために考案され実施されている壮大な歴史的実験である。CEFR に準拠したフランス語能力試験の DELFDALF や TCF の方に、国際標準としての能力評価基準の一般性を認めることはできる。ただし、この CEFR をそのまま適用しうるかどうか、その可能性の大きな事を認めつつも適用上の問題点は留保せざるを得ない¹⁵。CEFR の導入には一定のフィルターを施す必要性は重要である。

すでに、文化的ギャップについては多く指摘されており、例えば、中核的参加国に代表されるヨーロッパの社会文化的与件からくる「ヨーロッパ標準」という基準をそっくり導入することになりかねないのではないかと、という懸念や慎重論がある。CEFR の構想そのものが EU 共同体統合のための言語的戦略なのであり、いわば、言語能力の評価基準自体に、ヨーロッパ「ローカル」な性格を内包している。CEFR はとりわけコミュニケーション能力の評価に秀逸な「ヨーロッパ標準」システムであり、この質そのものが EU 複合体の特性にそったもので、この限りではその機能をよく果たすであろう。

この「ヨーロッパ標準」の日本の外国語教育への適用という問題を真剣に検証することを契機として、我々日本人が外国語を使用することで何を実現しようとしているのか、大学など高等教育機関ではどのようなコミュニケーション能力を習得させるべきなのか、さらには初等教育への外国語（英語）学習の導入に際しては、とりわけ何を教育の根幹に据えるのかを、今こそ緊急な課題として問い直す必要があるだろう。

¹⁵ 東京外国語大学世界言語社会教育センター主催の国際シンポジウム『高等教育における外国語教育の新たな展望 —CEFR の応用可能性をめぐって—』（2011 年 3 月 2-3 日）には、欧州やアジアからの研究者・教育者が参加し、CEFR と言語能力測定基準についての議論を行った。

<参考文献・関連サイト一覧>

- 国際交流基金編 (2005), 「ヨーロッパにおける日本語教育事情と Common European Framework of Reference for Languages」 (www.jpff.go.jp/j/publish/japanese/euro/pdf/cefrefl.pdf), PDF 版
- 財団法人日本私学教育研究所編 (2008), 『キャリアデザインにつながる多言語教育』, 財団法人フランス語教育振興協会編 (2010), 『仏検公式問題集』 (2010 年度版, 1-5 級) .
- 総合科学技術会議 (平成 21 年 8 月 5 日) 資料 4-3 「欧州の大学・大学院教育の動向」 (http://www8.cao.go.jp/cstp/project/jinzai/haihu6/siryu4-3.pdf)
- 東京外国語大学国際学術戦略本部 (OFIAS) (2008), 『東京外国語大学国際学術戦略本部 (OFIAS) 調査レポート・資料集 I』 (新井早苗編著)
- 富盛伸夫 (2005), 「EU 諸国における早期外国語教育」『外国語教育研究』外国語教育学会第 8 号、pp. 115-121
- 富盛伸夫 (2006), 「フランス語能力検定試験と言語能力評価基準」『外国語教育研究』外国語教育学会第 9 号、pp. 104-115.
- 富盛伸夫編 (2009), 『拡大 EU 諸国における外国語教育政策との実効性に関する総合的研究』平成 18-19 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 研究プロジェクト報告書, 東京外国語大学.
- 富盛伸夫 (2009), 「ボローニャ・プロセスからの示唆と言語教育改革への示唆」『拡大 EU 諸国における外国語教育政策との実効性に関する総合的研究』平成 17-18 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) 成果論文集, 吉富朝子編, 東京外国語大学.
- 富盛伸夫 (2009), 「ヨーロッパ連合 (EU) における高等教育改編と言語教育改革の問題点について」『外国語教育研究』外国語教育学会第 12 号、pp. 102-110.
- 富盛伸夫編 (2012), 『高等教育における外国語教育の新たな展望 —CEFR の応用可能性をめぐって—』 (2011 年 3 月 2-3 日) 東京外国語大学世界言語社会教育センター, 東京外国語大学.
- 野崎次郎 (2006), 「仏検の問題点」(Recontres Pedagogiques du Kansai 2006), *Rencontres* (20), 17-21. 関西フランス語教育研究会.
- Hidasi, Judit (2004), "How to Maintain Identity within the Integration Process in EU?" 「EU 統合化にみる多言語政策」神田外語大学『異文化コミュニケーション研究』第 16 号.
- 平尾節子 (2002), 「EU (ヨーロッパ連合) における言語政策の研究」愛知大学『言語と文化』第 8 号
- 文化庁 (2003), 『EU 拡大と言語政策に関する調査研究報告書』.
- 真嶋潤子 (2007), 「言語教育における到達度評価制度に向けて —CEFR を利用した大阪外国語大学の試み」『問谷論集』創刊号, 日本語日本文化教育研究会, pp. 3-27.
- 山崎吉朗他編 (2010), 『いかに 21 世紀の複言語能力を育てるか —中等教育における外国語—』.
- 山根宏 (2010), 「独検のレベル改訂と CEFR —本学におけるドイツ語教育の高度化—」立命館大学『立命館高等教育研究』第 10 号.

-
- Commission of the European Communities, *Higher Education in the European Community*, 1999
- Council of Europe, *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment*. Cambridge University Press. 2001
- Council of Europe, *LINGUA Activity Report*, 1999
- Council of Europe, *Modern Languages: Learning, Teaching, Assessment*, 1999
- European Commission, *The New EU Education and Youth Programmes*, 2000
- European Commission, *LINGUA Action A, B, C, D* 1998
- Little, D. & R. Perclova, *European Language Portfolio: Guide for Teachers and Teacher Trainers*. Council of Europe, Strasbourg, 2001